

歌人・平貞文像の変容

——『古今集』九六五番歌の享受を通して——

泉 彩 花

一 はじめに

平貞文は平安期歌人、歌物語『平中物語』や説話などに見られる好色譚の主人公「平中」として知られ、「色好み」の属性を以て語られる。多くの場合、彼は歌人としてよりも、物語や説話の登場人物として扱われ、実際の平貞文がどのような人物であったかには焦点が当てられることはない。

現在、貞文と「平中」という呼称は同一の存在を指すとされるが、実際の貞文と物語や説話に描かれる「平中」の姿は必ずしも同一視すべきではないと指摘したい。事実、『日本三代実録』や『古今和歌集目録』など、貞文と近い時代の伝記、『古今集』などの勅撰集には全て「平貞文」の呼称が用いられる。もちろん、貞文の号が「平中」であるという記録も確認できない。また、『平中物語』や『大和物語』など貞文をモデルとし、その詠歌を用いて創作された物語では全て「平中」の呼称が用いられる。「平貞文」「平中」の呼称が併用され、貞文の号が「平中」であると確認できるのは、明らかに虚構と考えられる滑稽譚を載せた『今昔物語集』が初例で、その後、『今昔物語集』の滑稽譚の享受と共に「平中」の呼称は貞文の号で

あるという認識が広まっていくのである。

以上から考えられるのは、歌人の平貞文と説話・物語の登場人物「平中」は本来別のものであり、扱われていたということである。貞文をモデルとして創作された『平中物語』の主人公を指す「平中」という呼称は、あくまでも創作された物語の登場人物を示す呼称であった。そのため『今昔物語集』以前の物語では「平中」という呼称のみを用いている。反対に、現実の貞文を指し示す場合は「平中」という呼称を用いてはいないのである。

本論は、貞文の活躍年代と成立年代が重なる『古今集』から、「平中」ではない本来の貞文像を導き出し、その貞文像の変容の因を、『古今和歌集』九六五番歌の享受を通して明らかにすることを目的とする。なお、本論では「色好み」という語は貞文や「平中」に対して用いられる例を鑑み、男女交際の淫奔なことを示す否定的な意味で用いる。

二 『古今集』同時代歌人としての平貞文

歌人としての貞文の姿を最も詳細に記録しているのは、貞文活躍期である九世紀後半から一〇世紀前半に編纂された勅撰集、『古今

集』である。貞文の歌は『古今集』に九首入集する。

『古今集』は紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人が撰者となつて編纂された日本最初の勅撰和歌集で、仮名序・真名序によると九〇五年頃完成とされるが、確認できる最も新しい歌が「亭子院歌合」の歌であることなどから、現在の形になったのは九一三年以降と考えられる。没年が九二三年である貞文は、『古今集』編纂の真つただ中を生き、撰者達と同時代の歌人であつたことが分かる。

『古今集』の収載歌数は一一二一首、そのうち詠者が判明しているものが六五一首、よみ人知らず歌が四六〇首とされ、最も多く入集した歌人は撰者、紀貫之の一〇二首で、詠者が判明している歌の一五・六%を占める。貫之を含め、撰者四人の歌だけで詠者が判明している歌の四三・二%を占め、『古今集』において撰者の存在が大きなものであつたと分かる。

また、入集歌人は男性九九名、女性二五名の計一二四名であるが、その多くは一首や二首のみ入集している歌人で、一首入集の歌人が六七人、二首入集の歌人が二人である。このように考えると、撰者ではない貞文の、九首入集という数字は決して少なくはない。

『古今集』内の歌の製作年代は「よみ人知らず時代の歌」「六歌仙時代の歌」「撰者時代の歌」の三つに分類が可能であり、そのうち貞文の詠歌が含まれるのは「撰者時代の歌」である。「撰者時代の歌」で撰者を除き、多く入集した同時代歌人を挙げると入集歌数順に、素性法師、伊勢、藤原敏行、清原深養父、藤原興風、在原元方、大江千里、平貞文、坂上是則となる。これらの人物は貞文を除き、現在歌人として認識されるが、同じく歌人として活躍した貞文だけ

が物語や説話の「平中」の印象で認識されているという事実は注目すべき点である。

さらに、『古今集』撰者達と貞文の関係性が複数の歌合の記録から確認できる。特に、宇多院の主催した「某年宇多院物名歌合」には紀貫之、紀友則、壬生忠岑の『古今集』撰者三人や藤原興風、清原深養父の名と共に貞文の名が確認できる。貞文は一二番二四首の歌合の内、『古今集』撰者の紀貫之に次ぐ数の歌を詠んでおり、紛れもなく宇多歌壇の歌人の一人として、公に認められていたことが分かる。また、貞文が歌合を主催した記録もあり、歌人として私的な活動も行っていたことも分かっている。

以上の理由から、『古今集』における貞文の歌は、彼が歌人として活躍した時代に編纂されたもので、貞文の歌が入集する他のどの勅撰集・私歌集・物語よりも貞文の本来の姿を描き出していることが考えられる。そのため、本論では『古今集』における貞文詠歌を、平貞文という人物についての最も信用すべき資料として扱う姿勢をとる。

三 平貞文『古今集』入集歌

寛平御時、藏人所のをのこども嵯峨野に花見むとてまかり
たりける時、かへるとてみな歌よみけるついでによめる

花にあかでなにかへるらむ女郎花おほかるのべにねなましものを

(古今集・秋上・二三八・平貞文)

今よりはうゑてだに見じ花すすきはにいづる秋はわびしかりけり

(古今集・秋上・二四二・平貞文)

仁和寺に菊の花めしける時に歌そへて奉れとおほせられけ

れば、よみてたてまつりける

秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつるふからに色のまされば

(古今集・秋下・二七九・平貞文)

白河のしらずともいはじそきよみ流れて世世にすまむと思へば

(古今集・恋三・六六六・平貞文)

枕より又しる人もなき恋を涙せきあへずもらしつるかな

(古今集・恋三・六七〇・平貞文)

秋風の吹きうらがへす葛の葉のうらみても猶うらめしきかな

(古今集・恋五・八三三・平貞文)

官解けて侍りける時よめる

憂き世には門させりとも見えなく、になどか我が身のいでがてにする
ありはてぬ命まつ間のほどばかり憂きことしげく思はずもがな

(古今集・雑下・九六四、九六五・平貞文)

春の野の繁き草葉の妻ごひにとびたつ雉のほろろとぞなく

(古今集・雑牀・一〇三三・平貞文)

貞文の『古今集』入集歌九首の内訳は秋歌三首、恋歌三首、その他三首で、全て独詠歌である。実際に貞文と同時代に生きた撰者たちが選んだ『古今集』入集歌からは本来の貞文像が垣間見える。

二三八番歌は詞書にあるように右兵衛少尉であった貞文が、藏人所の男性達との嵯峨野への花見に向いた際に詠まれた歌である。花を女にたとえる様子から一見「色好み」な歌のような印象を受けらる。しかし、『古今集』秋歌上の二二六―二三八番歌までの女郎花を詠んだ「女郎花歌群」と言われる箇所では、その全てで女郎花を女に例えており、一般的な表現であると言える。それよりも注目す

べきは花に「飽く」という表現で、女郎花の花に対して「飽く」という表現を用いる例は当該歌が最も古い例である。花に「飽く」という表現は、通常桜の花などに用いられ、『古今集』内でも「桜花春くははれる年だにも人の心に飽かれやはせぬ(古今集・春上・六一・伊勢)」「春霞たなびく山の桜花見れども飽かぬ君にもあるかな(古今集・恋四・六八四・友則)」などの例が確認できる。この歌からは、貞文が新しい表現を用いて歌を詠んでいたという歌人としての技量と、藏人所の男性たちと共に野遊びに出かける官人としての姿が窺える。

二四二番歌も詠歌状況は不明である。ここでは「花すすき」が秋風に吹かれることによつて、目に見えない秋が可視化され、秋のわびしさが耐えがたいという心情を詠む。当該歌で注目すべきことは『躬恒集』の贈答歌において、躬恒が詠んだ答歌との類似であろう。

山のほとりたづぬる道に僧の家あり、もみち散りみちて残りの花まがきにあり、花すすき風にしたがひてなびく、人を招くに似たり、源少将馬よりおりて

人知れぬやどになうゑそ花すすき招けばとまる我にやはあらぬ

(躬恒集・一八八・源少将)

僧にかはりて

今よりはうゑこそまさせ花すすき穂にいづるときぞ人よりきける

(躬恒集・一八九・躬恒)

『躬恒集』内の記述からこの躬恒の返歌は延喜一八年に詠まれた歌であり、『古今集』二四二番歌よりも後の歌であることが分かる。

この歌と『古今集』二四二番歌は全く逆の内容を、ほぼ同じ言葉を用いて詠む。共通語数は「今よりは」「うゑ」「花すすき」「穂にいづる」の四つで、結句以外はほぼ同じ語を用いる。この『躬恒集』の歌からは、貞文が『古今集』撰者である躬恒に影響を与えたことが指摘できる。貞文と躬恒は複数の歌合に同席したことが資料から確認できる上、躬恒自身が貞文主催の歌合に参加した記録もある。貞文と躬恒に歌人としての交流があったことは確かであろう。また、『躬恒集』の贈答は、躬恒が『古今集』二四二番歌を用いている、ということを手相の源少将も理解しているからこそ成り立つ贈答であり、貞文の歌が『古今集』編纂期の人々に周知されていたことも指摘できるのである。

二七九番歌は宇多院に菊を献上する際、命じられて詠んだ歌である。次に宇多院が『古今集』内で人に歌を詠めと命じた例を一覧にする。

巻	歌番号	命じた相手	記述
秋上	一七七	紀友則（人に代わりて詠める）	歌奉れ
秋下	二七九	平貞文	歌そへて奉れ
秋下	三〇五	凡河内躬恒	よませ給ひければ
秋下	三一〇	藤原興風	古き歌奉れ
恋五	八〇二	素性法師	御屏風に歌書かせ給ひつる時
雑上	九一九	紀貫之	よませ給ひける
雑上	九二七	橘長盛	歌よませ給ひけるによめる
雑林	一〇六七	凡河内躬恒	題にてよませ給ひける

宇多院から歌を詠むように命じられた相手は凡河内躬恒が三度と最も多い。また、宇多院は、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、素性法師、藤原興風など、『古今集』撰者と、貞文を含む『古今集』多数歌入集歌人達に歌を詠むよう命じている。以上のことから、貞文は『古今集』撰者時代の歌人として宇多院から歌を求められ、公に歌人として活躍した人物であったと指摘できるのである。

恋歌の六六六、六七〇、八二三番歌の三首も同じく詠歌状況不明の歌である。貞文の『古今集』入集の恋歌にはその後の「平中」が持つような「色好み」な属性は見られない。むしろ、同音の繰り返しや掛詞など技巧的な表現を用いる様子が見られ、歌人として活躍した人物らしい恋歌を詠んでいる。

九六四、九六五番歌は貞文が官職を解かれた際に詠んだ歌である。『古今集』内で官職に関する憂いを詠んだ歌は九六一〜九六七番歌のたった七例、さらに官職を解かれたことを詠む歌はそのうち四例で、その半数を貞文の歌が占める。この二首からは、宇多院の生母を大叔母に持ちながらも官位が低かった貞文が、官人として苦悩を抱いていたということが分かる。

一〇三三番歌はいわゆる誹諧歌で、雉の「ほろろ」という鳴き声に自身が「ほろほろ」と泣く様子を掛ける。上の句の「春の野のしげき草葉の妻こひ」は『万葉集』などに見られる序詞の用法であるが、それを踏まえ新たな表現を用いた歌を詠んでいる部分に恋歌と同じく技巧的な歌を詠む貞文の歌人としての姿が見られる。

以上のように、『古今集』における貞文は、多数の歌が入集し、撰者や宇多歌壇の歌人たちと共に活躍した歌人であった。貞文と実際に歌人として関わりのあった『古今集』撰者たちが入集させた貞

文の歌は、本来の彼の姿を知るための資料となる。その貞文の『古今集』入集歌から浮かび上がる人物像は、後世の我々が「平中」から想像する、「色好み」な姿とは異なり、官人として自らの官職に悩み、歌人として技巧的な歌を詠み、新たな歌の表現に挑戦する姿であった。

四 『古今集』九六五番歌の享受

歌人として活躍した本来の貞文の姿を残す『古今集』入集歌の内、最も人々に伝播した歌は九六五番歌である。九六五番歌はその詞書からも分かるように、貞文が官職を解かれて嘆く心情を詠む、男性の官人特有の詠歌状況で詠まれた歌である。この歌が伝播したことは『新撰和歌』¹⁾『俊頼髓脳』²⁾『定家八代抄』³⁾などの歌論書で引用されていることから確認できる。このように、九六五番歌は貞文詠歌の中で最も伝播した歌であると言える。しかしながら、その享受に目を向けると、本来の歌意とは異なった形で行われていくのである。この事は、後の「色好み」な貞文や「平中」像を形作る一因ともなった。

次に挙げるのは、『古今集』九六五番歌の享受の例である。

ありはてぬ命待つ間のほどばかり憂きことしげく思はずもがな

(伊勢集・一六八・伊勢)

ながからぬ命待つ間のほどばかり憂きことしげく嘆かずもがな

(重之女集・一一五・重之女)

ようさり、まかり出でて文見るに、殿なりけるものを、ま

づ開けて、いみじう言はれても、みづからのみ

ありはてぬ命待つ間の程ばかりいとかく物を思はずもがな

(和泉式部統集・六四七・和泉式部)

ありはてぬ身だに心になはずは思ひの外の世にもふるかな

(赤染衛門集・三五・大江為基)

故御息所の御姉、おほいこにあたりたまひけるなむ、いとらうらうしく、歌よみたまふことも、おとうとたち御息所よりもまさりてなむいますかりける。わかき時に、女親はうせたまひにけり。まま母の手にいますかりければ、心にもものかなはぬ時もあり。さてよみたまひける。

ありはてぬ命待つまのほどばかり憂きことしげく嘆かずもがなとなむよみたまひける(略) (『大和物語』第一四二段)

このように九六五番歌は、多くの場合女性によって、自身の身上に關する憂いを詠む際に享受される。『古今集』の歌意のまま、男性が影響を受けたことが確認できる例は『赤染衛門集』の大江為基の例のみである。また、『源氏物語』の松風、鈴虫、宿木卷⁴⁾や『住吉物語』上巻⁵⁾においても、引歌として女性の登場人物が男女の仲に対する憂いを感じた場面で用いられている。

これほど伝播し、享受された歌でありながら、貞文の歌をもとに創作された『平中物語』では、『古今集』九六五番歌が確認できない。『古今集』九六五番歌に相当する別の歌が、『古今集』九六四番歌と同じ歌とともに第一段に確認できるのみである。『古今集』九六五、九六五番歌と『平中物語』第一段の当該部分の詠歌状況はどちらも官職を解かれた悩みを歌に詠み、近似している。その上、『古今集』

九六四番歌と同じ歌は確認できるのにも関わらず、九六五番歌に相当する歌だけが異なった形を残している。

ありはてぬ命待つ間のほどばかり憂きことしげく思はずもがな

(古今集・雑下・九六五・平貞文)

なりはてむ身をまつ山のもとときすいまはかざりと鳴き隠れなむ

(『平中物語』第一段・平中)

この二首は一見よく似た歌のようにも感じるが、全くの別の歌であり、類歌とするにも無理がある。現存の『平中物語』には『古今集』の九六四番歌は確認できても、九六五番歌は確認できない。『平中物語』成立当初から九六五番歌に相当する歌がなかったか、伝承の過程で今の形になったかは不明だが、『古今集』と同じ詠歌状況で九六五番歌だけが確認できないということは注目すべき点である。

以上のように、『古今集』九六五番歌は、貞文が官職を解かれたという非常に男性的な詠歌状況で詠んだ歌であるにも関わらず、貞文本人とは切り離され、女性たち、女性登場人物の歌として享受されていることが指摘できる。

このような『古今集』九六五番歌の享受に関しいくつかの先行研究がある。堀一郎氏は古くから秀歌として認められた九六五番歌は人々の人生の慨嘆の場で口ずさまれ、『大和物語』において虚構の女性の歌とされたことにより「貞文の歌であつて貞文の歌でなく⁶⁾なつた」と指摘する。また、玉田沙織氏は、九六五番歌は貴族社会に広く知られ、平安時代半ば頃には女性がいかに「命待つ間」を生きたかという命題の下に受容されるようになったとし、更に、九六

五番歌の「憂きこと」の抽象性が読み換えの余地を残し、一首全体が普遍的な嘆きを詠じていた為に様々な享受を生んだと指摘する。両氏の指摘のように、貞文の九六五番歌は、官人としての憂いを詠みながらも、その歌は次第に異なった形で享受され、貞文本人から乖離していくのである。

また、『古今集』九六五番歌が女性たちにより男女関係に関する憂いを詠む歌として享受される経緯については、『大和物語』が最も古い享受の例であると考えられる。貞文と同時代の歌人、伊勢の私家集『伊勢集』にも、『古今集』九六五番歌は確認できるが、これは享受というよりも混入の可能性が高い。そして、この『伊勢集』への混入は『古今集』九六五番歌が女性の歌として享受されていたからこそ起きた混入である可能性を指摘したい。つまりこの混入は、九六五番歌が女歌として扱われたが故に、後の人々によって伊勢の歌として収載された可能性が考えられるのである。

『重之女集』と『和泉式部統集』における享受については、直接の関係が確認できる。和泉式部が重之女から歌人として影響を受けていたことが『重之女集』と『和泉式部統集』を比較することで明らかになり、『古今集』九六五番歌の享受についても、重之女と和泉式部の関係性について論じた先行研究によって指摘されている。平田喜信氏は『重之女集』と『和泉式部統集』の九六五番歌の享受に対し、『古今集』からの安易な流用ではないとした上、二人の女性歌人の歌集が共に貞文の九六五番歌を踏まえた巻末歌を有していることは偶然ではなく、女歌としても通用する九六五番歌が平安中期の女性たちに馴染んだ歌であつたからであると指摘する。また、『大和物語』一四二段で用いられた例を「まさに典型的な女歌とし

ての転用」であるとし、『古今集』の九六五番歌さえも伝承の一部である可能性もあり、作者をさほど意識せず、女性たちに享受されたとする。また、『重之女集』『和泉式部統集』は『古今集』よりもむしろ、『大和物語』⁸⁾に見るような歌語りの世界を直接の契機としている可能性がある⁹⁾と指摘する。

『古今集』九六五番歌が伝承の一部であるという点は、「ありはてぬ」や「命待つ間」と詠んだ歌の例が『古今集』九六五番歌以前に確認できないことから可能性は低いと考える。しかし、和泉式部が重之女から様々な影響を受けたことを考えると、やはり『古今集』九六五番歌の女性たちによる享受が、重之女から和泉式部に受け継がれたことについて疑う余地はない。『伊勢集』を混入と考えると、『古今集』九六五番歌が享受された最古の例は『大和物語』となる。また、『古今集』全体が人々に享受された際、普遍的な嘆きを詠むともとれる九六五番歌は様々な場面で享受されたであろうし、普遍的であるがゆえに、享受に男女の別はなかったであろう。そう考えると、やはり女歌として享受される要素は『古今集』にはない。そして、『大和物語』が『古今集』九六五番歌を女歌として以降、多くの女性に享受されていくことを考えると、『古今集』九六五番歌を女歌として確立させたのは『大和物語』である可能性が高い。『大和物語』が貞文の『古今集』九六五番歌を架空の女性の歌としたことにより、貞文本人と『古今集』九六五番歌を乖離させ、結果的には貞文から歌人としての属性を奪う原因ともなった可能性が指摘できるのである。

五 『大和物語』が『古今和歌集』九六五番歌で 虚構の物語を創作した背景と影響

『大和物語』において「平貞文」という記述は確認できないが、「平中」の登場章段が四六、六四、一〇三、一二四段の四つ確認できる。よって、『大和物語』には「平中」登場章段が四つと、貞文の和歌が享受された章段が一つ確認できるということになる。

多くの先行研究で指摘されるように、『大和物語』はその内容で二分割できる。その区切れば諸説あるが、多くの先行研究が従う一四六段と一四七段の間に区切れがあるという説に従う。その上で、第一部は「古今集時代から後撰集時代の話」、第二部は「古今集時代以前の話や伝承・伝説などの話」という区別をすることができる。よって、「平中」登場章段や、貞文の『古今集』九六五番歌は第一部にのみ確認できることとなる。次に、『大和物語』内の『古今集』入集歌を確認すると、『大和物語』第一部には五首、第二部には一〇首計一五首確認できる。ここでは阿部俊子氏の『校本大和物語とその研究』⁹⁾を参考とした。なお、阿部氏は一四三段の和歌を『古今集』七一八番歌と同一としたが、類歌と判断し同一として扱わない。第一部の『古今集』入集歌五首と共通歌を持つ五章段は、一四二段目以外に二六、七五、一四四、一四五段であり、五章段の内、一四二段と二六段以外は『古今集』の詠歌状況と差異はない。

第二六段は『古今集』八一一番歌の読み人、詠歌状況共に不明の歌を用い、孚子内親王(桂のみこ)と敦康親王との恋愛関係の噂を基にした創作であると考えられる。孚子内親王と敦康内親王の関係については『大和物語』二〇段や『後撰集』でも確認できるため、

全くの虚構ではなく、『古今集』の読み人知らず歌を用いて二人の話を補強する形で創作されたものと考えられる。

よって、『大和物語』第一部の『古今集』と共通歌を持つ章段の中で、一四二段だけが全くの虚構である事は異例であると指摘できる。

また、「平中」登場章段の内容を確認するとその全てが女との歌の贈答を含んだ恋を描いた章段である。しかしながら、『大和物語』全体の内容を確認すると必ずしも恋を描いた章段だけが多いわけではない。貞文をもとにした「平中」が登場する章段がありながらも、なぜ『古今集』九六五番歌を架空の女性の歌とする必要があったのであろうか。この点は、「平中」登場章段が全て恋の話であることに注目すると見えてくるのである。

『大和物語』第一段において「平中」登場章段は全て恋愛関係の章段であるが、他の登場人物はどうであろうか。そこで『大和物語』第一部内で複数回登場する登場人物とその章段の内容を調査した。すると、『大和物語』第一部には登場人物の描き方に一定の方針があることが指摘できるのである。

次の表は『大和物語』第一部の複数章段登場人物を挙げ、その登場章段の内容を恋、離別、官人、和歌、他の五つに分類し、それらの回数を一覧にした。各項目の内容は、「恋」は章段内で恋愛をしている章段、「離別」は別れに際して歌を詠んでいる章段、「官人」では宮中での官人としての活動が描かれている章段、「歌」は上記三つ以外で歌を詠んでいる章段、「他」は名前のみが登場する等、話の本筋とは関わりのない章段である。

名前（作中表記）	登場回数	恋	離別	官人	和歌	他
敦康親王（（故）式部卿宮）	8	5			1	2
藤原兼輔（堤中納言）	8		1	5	2	
孚子内親王（桂のみこ）	7	7				
元良親王（故兵部卿宮）	6	5			1	
平兼盛（兼盛）	5	3	1		1	
平貞文（平中）	4	4				
藤原敦忠（故権中納言）	4	4				
藤原定方（三条右大臣）	4		1		2	1
藤原忠平（おほきおとゞ）	4		3	1		
源清蔭（（故）源大納言）	4		3		1	
藤原師尹（左兵衛の督の君、侍従の君、あや君）	3	3				
藤原実頼（左のおとゞ）	3		1	1	1	

図を見て分かるように、『大和物語』第一段の登場人物たちの描かれ方には一定の傾向があることが分かる。それは「恋」に関する章段に描かれる人物と、そうではない人物の二つに分けられるということである。『大和物語』第一部には様々な人物が登場するが、「恋」関連の章段に登場する人物は限られ、そうではない人物は全く「恋」関連の章段に表れないのである。この傾向は偶然というにはあまりにも明確に描き分けられ、その上「官人」関連の章段に登場する人物と「恋」の章段に登場する人物が重ならないという点も興味深い。

仮に貞文の『古今集』九六五番歌を、本来の詠歌状況のまま「平中」を主人公に歌語りにした場合、官途に嘆く姿は明らかに「官人」に分類されるであろう。その場合、『大和物語』第一部の「恋」の章段と「官人」の章段の両方に登場する人物はいないという傾向に反することとなる。

『大和物語』は『古今集』や『後撰集』などの勅撰集や、私家集などに基づいた歌語りの内容とそれほど相違はないと見られる。しかし、物語である以上作者が存在し、作者の編纂意図に基づいていることも確かである。『大和物語』第一部の登場人物の描かれ方からは、作者がそれぞれの登場人物に一定の役割を持たせ、編纂していた可能性が指摘できる。そしてこの結果から導き出されるのは、『大和物語』作者が「平中」に与えたのは「恋をする男」としての姿であり、宮中で官途に悩む『古今集』九六五番歌の貞文の姿ではなかった。そのため、『古今集』九六五番歌を架空の女性が詠んだ歌として用い、物語を創作したと指摘できるのではないか。

以上のように、『大和物語』で『古今集』九六五番歌を用い、架

空の女性の物語を創作したことによる効果は、「平中」という人物を『大和物語』の作者の思惑通りに「恋をする男」として描き、作品内の「平中」像を統一したことである。もちろん、既に秀歌として伝播していた『古今集』九六五番歌を用い物語を創作する手腕を見せることも『大和物語』作者の目的の一つにはあったであろうが、結果的には貞文から『古今集』九六五番歌を引き離し、「平中」という人物を「恋をする男」として描き出すことに効果を発した。これ以降、「平中」はより「恋をする男」としての属性を濃くし、やがて「色好み」の属性を持つようになる。また、『古今集』九六五番歌は女歌として享受されるようになっていくのである。

六 終わりに

一般的に平貞文という人物は「平中」と同一の存在と見なされ、「色好み」の属性を以て語られる。しかし本来、「平貞文」は実際の貞文を指す呼称として、「平中」は物語の登場人物など、創作の存在を指す呼称として使い分けがなされていた。しかし、次第に「平中」の呼称は貞文の号とされ、「色好み」な姿を描く滑稽譚と共に享受されていくのである。

実際の貞文については、同時代歌人で、交流があった撰者達の手で編纂された『古今集』が最も信頼できる資料となる。『古今集』の貞文はその入集歌の相対的な多さからも、歌人として認められていたことが指摘でき、その入集歌からは、歌を用いて宇多院をはじめとする宮中の人々と関わる様子や、官人として官途に悩む姿、新たな表現を用いて歌を詠むことに挑戦する歌人としての姿がうかがえる。以上から貞文は、『古今集』成立期において撰者たちにと同

様に活躍した歌人であるという事実が指摘できる。また、同時代歌人たちと共に複数の歌合に参加した記録もあり、実際に歌人としての活躍があったことも確認できる。

しかし、貞文の歌の享受を見ると、貞文本人とは乖離して享受されていったことが指摘できる。

貞文詠歌の中で最も伝播した『古今集』九六五番歌は、官途に悩む心情を詠むという男性官人特有の詠歌状況で詠まれた歌である。しかし、その享受の例を見ればほとんどが女性に享受されている。『古今集』入集歌はどれも男女問わず伝播し、様々な形で享受された。九六五番歌は本来の歌意以外にも様々な場面で利用できる普遍性があるが、女性にばかり享受されるという注目すべき特徴を持つ。この特徴は『大和物語』が物語内で「平中」に「恋をする男」としての属性を付すため、『古今集』九六五番歌を架空の女性の歌として利用し、その内容が女性たちの共感と呼び享受されていったことで生じたと思われる。『大和物語』による『古今集』九六五番歌の利用は、貞文本人から『古今集』九六五番歌だけではなく、歌人としての属性までも乖離させることとなった。これ以降、貞文は「恋をする男」としての属性を強め、やがて「色好み」の属性を以て語られるようになる。貞文の人物像の変容は、『古今集』九六五番歌の享受を見ることで知ることが出来るのである。

注(1) 『新撰和歌』三三五番歌（『新編国歌大観』による）

(2) 『俊頼髓腦』一一八番歌（『新編国歌大観』による）

(3) 『定家八代抄』一五四一 番歌（『新編国歌大観』による）

(4) 新編日本古典文学全集『源氏物語』松風卷（②四〇二頁、鈴虫巻（④

三七八頁）、宿木巻（⑤四〇八頁）

(5) 新編日本古典文学全集『住吉物語』上巻（『新編全集九三頁』

堀一郎「歌の受容と物語 平定文の歌をめぐる」『日本文藝學』第三十五号 1999年3月20日

(7) 玉田沙織「平中「ありはてぬ」詠受容に見る女人の生」『名古屋大学国語国文学』107巻2014年11月

(8) 平田喜信『もの思へば』『もの思ふ』考』『王朝和歌と史的研究』笠間書院 1997年12月

(9) 阿部俊子「校本大和物語とその研究 増補版」三省堂 1974年

* 歌本文は『新編国歌大観』により適宜表記を改めた。

* 本論における『大和物語』本文引用は、片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注・訳『新編日本古典文学全集 12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』による。